

身体的欠損がある者の生業のエスノグラフィー：

タンザニア・ダルエスサラームにおける物乞いを中心に

仲尾（清水） 友貴恵

【要約】

本論文は、タンザニア連合共和国の首都都市ダルエスサラームにおける事例研究を通して、身体上に顕在的で他者から「欠損」とみなされ得る、かつ、日常生活の中で一定の行為的不自由を強いる身体的特徴（本文では顕在的「欠損」と呼ぶ）を有する人々（本文では顕在的「欠損」保有者と呼ぶ）が、どのように生活を成り立たせているのかを探究する。ダルエスサラームは国家による福祉提供にかかわる諸制度が十分に発達しておらず、激しい人口流入と労働力の競争がある。このような空間で、顕在的「欠損」の有無にかかわらず人々が混淆して生活を営む様や、顕在的「欠損」に由来する「異質性」が前景化と後景化を繰り返し揺らぐ様を捉える。

顕在的「欠損」保有者は、福祉国家では「障害者」として福祉対象とみなされることも多く、グローバル化が進む現代的文脈では、彼らを基本的には「自力で生活基盤を築けない者」とみなす観点は一定の支持を得ている。他方、福祉制度は万国に遍く行きわたってはいない。福祉制度が貫徹していない社会の「障害者」の生活基盤は十分に光が当てられてこなかった。さらに今日的状況として、福祉国家化は（かつてのように）普及の一途を辿るとは単純に想定できなくなっており、障害者の人権保障が世界的課題とされている。このような現代的文脈に鑑みて取り組む意義のある問いとして、本論文は以下の問いに取り組む。顕在的「欠損」保有者は福祉制度に頼らずにどのように生活しているのか。その生活の場では、「彼（女）ら」と周囲の人々との間で生活基盤をめぐるどのような交渉が行われているのか。「彼（女）ら」は、社会のなかでどのような位置にあるのか。本論文の目的は、これらの問いに対して経験的知見を提示することである。

本研究は、障害学的転換——「障害者」というカテゴリーの脱自然化（構築主義的転換）、および、「障害」を限られた専門領域のみで対処可能な部分的な問題として捉える視点から人間そのものや社会全体にかかわるトータルな問題として捉えるようになる観点の転換——を理論的立場として引き継ぎつつ、社会制度上「障害者」の「分類・分離」が貫徹していない社会として、ダルエスサラーム社会を事例とする。1章をあててダルエスサラームにおける「障害者」の社会的分離の歴史について、その有無を含めて紐解き、4章を割いて、国家制度としての生活保障システムが機能しておらず、かつ、共同体といったものに生活を

依存できない都市的環境の中で、顕在的「欠損」をもつ人々が生活基盤をいかに整えているかの実態の記述と、その背景的文脈の解釈を行う。

第1章では、「障害者」をめぐり調査地で見られる諸概念について今日の状況の概観を示し、その歴史的背景を、第一次世界大戦後以降の英国による行政的支配下に入ってから今日までのタンザニア大陸部の史料等に基づき探求する。「障害」に結び付いた顕在的「欠損」には、従来「欠如」としての意味づけをされていた系譜と、「異質」と意味づけられていた系譜という二つの異なる系譜があることを確認し、前者から「肢体障害者 *watu wenye ulemavu wa viungo*」(ないし「肢体不自由者」)、後者から「アルビノ *albino*」という、今日のタンザニアにおいて典型的な「障害者」とみなされている2つの概念＝カテゴリーを事例として取り上げる。今日、国際社会においては規範的認識として身体形状で「障害者」を定義する視座に批判的な立場が普及しつつある。しかしタンザニアではこの国際社会における規範を表面的には受け容れつつも、実態として「障害者」を身体形状で定義する概念＝カテゴリーが有力である。この背景についても説明づける。まず「肢体障害者」について、1950年代までは行政に認知される「欠損」には従軍性が必須であったが、①労災法の導入と、②労災法の実現過程における義肢提供システム構築主体の医療化という2つの要因で、「欠損」の発生文脈を問わない「肢体障害者」という概念＝カテゴリーが生じたことを跡付ける。次に、1970年代以降の文献およびアルビノ・セルフ・ヘルプ・グループからの聞き取りに基づき、「アルビノ」カテゴリーの成立史を概観する。「アルビノ」はポストコロニアルな文脈において医学的診断に基づく社会運動的連帯がされ、華々しく構築された概念＝カテゴリーである。植民地期末期に医療的要請から構築された「肢体障害者」は、人々の分類概念＝カテゴリーとしては複雑な意味合いを纏い、相対的には生活上明瞭に人々を分類する力をもたないカテゴリーである。それに対して「アルビノ」は行政構造上部からの働きかけ、組織化、人権運動との密接なかかわりがあり、より急速に措定され普及した概念＝カテゴリーである。植民地構造と、ポストコロニアル時代における医療的診断を根拠とする社会運動基盤構築という、植民地構造の(表面的な)断絶を跨いだ「欠損」への意味付けという、本来であれば両立しないはずの人々の分類概念＝カテゴリーが、タンザニアでは社会運動の展開を希求する中で便宜的・折衷的に用いられていることを明らかにする。

第2章から第5章はフィールドワークに基づき、2012～2014年のダルエスサラームにおける顕在的「欠損」保有者の生活実態の記述を重点とする。

第2章前半部では調査の全体的方法論を述べ、インタビューの全体像を概観する。インタビューの多くはダルエスサラーム外で生まれ、顕在的「欠損」を負った後に移住してきた人々であることや、移住に際して既存の社会関係(親族等)を利用した場合としない場合があることが明らかとなる。顕在的「欠損」保有者は従来のアフリカ都市移住研究では看過されてきた。そのため、アフリカ都市移住研究との架橋を試みつつ、第2章と第3章

では社会関係と生業に注目しつつ移住経験の詳細な事例研究を行う。第2章後半部では「親族を介した移住」に焦点を絞り、3人の事例研究を行う。先行のアフリカ地域の障害者研究に都市移住例が散見されるように、アフリカにおいて顕在的「欠損」保有者の移住・移動自体はよく見られる。しかし、従来はその移住・移動は構造的条件でもって説明されてきたため、移住の動機そのものは分析焦点となつてこなかった。これを問題意識として、第2章後半部では、職・医療・教育・結婚相手といった、先行研究が明らかにしてきた構造的条件の存在だけで顕在的「欠損」保有者の移住・移動は説明できないのではないかという仮説を立て、彼らの移住・移動の経緯と、その後の都市生活のあり様という「ミクロな事情」を、移住時に用いた社会関係との関係に目配りして検討する。語られた移住理由とその背景的事情、移住後おもに従事した生業活動の内容とそれを可能にした要因、移住後に受けた医療ケアの内容とそれを可能にした要因等に着目する。この結果、確かに先行研究が指摘してきた職・医療・教育の機会集中を希求する移住と重なるような事例があるものの、必ずしも移住は経済人的な意味での合理性を起因としていないということを明らかにする。親族を介して出身地や民族など出自背景の近い人々の集住地に転入し、そこで定着するという、構造条件的説明と親和的な例もみられる。ただしそれだけではなく、「欠損」保有者特有の生活の利便を追及する過程で、出自背景に共通性を持たない人々の中に住み、日々の対面の関係性で近隣住民との関係を構築・維持している例もある。親族を介する移住の実践の多様性を提示する。

第3章では、親族を介さない移住者の移住と移住後の生活について事例研究を行う。日本における「障害者の脱家族」研究で示唆された内容を便宜的に拡大解釈しつつ、親族に知らせずに都市移住した3人の肢体不自由者の事例を分析する。アフリカ地域の「障害者」移住に言及してきた先行研究においても、親族を介さない都市移住は注目されてこなかったが、「脱家族」研究の知見をふまえることで、事例を特例的なものとしてではなく、公的社会保障制度が脆弱で肢体不自由者の介助負担が近親者にかかる環境下で必然的に生じる現象として解釈する。肢体不自由者が（合法、違法問わず）経済活動に参加でき、男性には経済力が求められるために肢体不自由性が男性の生殖家族形成の障壁となりにくい調査地において、男性には生殖家族形成が脱定位家族として機能しうることが明らかとなり、さらに、男性の場合は同士の存在を頼って単身で移住する道があることも明らかとなる。他方、女性の場合はより日本の事例に類似しており、生殖家族形成や同士の存在を頼っての移住がより困難である。分析の結果、肢体不自由者が移住に際して関係を断絶する可能性がある「親密な他者」を捉えるためには、定位家族だけではなく生殖家族にも注目する必要性を指摘する。生活に要される介助は「介助者」に担われるわけではなく、一時的に周囲の人の手を借りることの連続で賄われることも明らかにする。移住後の家族関係再構築期には、〈都市移住者〉という立場こそが肢体不自由者に身体状態とは無関係な社会的地位を与えているこ

とを指摘する。〈都市移住者〉は、転出元の人々にとっては希少な〈窓口〉として、現金を通じた貢献という形で転出元との関係を新たにすることができていた。あるいは、転出元における社会関係の悪化や生活困難を移住契機とした人々にさえ、ノスタルジックに望郷や親子関係を語りうる環境をもたらす。〈脱家族〉によって先行研究が指摘したような親族関係へと収斂可能な関係の（再）構築がなされるだけではなく、都市移住というチャンネルを介することで、より複雑な形で〈家族〉関係の再構築が生じていたため、肢体不自由者は〈脱家族〉前の状況とは大きく異なる社会関係の構築が可能であることを明らかにする。さらに、血縁者を介さない移住者にとって、「路上」こそが、人々と出会う場であり、そこから様々な資源が生活の中に導入されていることを示す。

第4章と第5章では、第2章と第3章でその生業としての重要性が示唆された「物乞い」という営為を分析焦点とする。第4章では、物乞いがどのように生業的であり、どのように生業的ではないのかを明らかにするために、まず、2家族の家計簿等から物乞いの経済的効果を検証する。物乞いが経済的側面からは十分に生業的であることを実証する。次に、物乞い従事者（物乞）の所作や語りを資料として、物乞いという営為をめぐる従事者の葛藤や、職業的アイデンティティの獲得について検討する。これより、物乞いは従事者が都市で経済的シティズンシップを獲得する手段となる一方で、規範的家族関係（特に男性にとって）や、規範的労働イメージと緊張関係にある営為であることが明らかとなる。従事の開始にあたって「常識」的な価値観の相対化という苦痛を伴う点が一般的な生業とは異なる特徴であることを明らかにし、物乞いが、物質的な意味での生産効果と他者との関係構築を通して従事者に社会参加を促す点で生業的である反面、従事者がそれを必ずしも生業と認められないという両義性を指摘する。

物乞い場においてなぜ物乞い従事者と通行人とが親密になり得るのか、という第4章の事例記述で示唆された問いを第5章で探求する。相互行為論的知見を参照枠組みとして物乞い場でのやり取りを分析し、物乞いという営為を具体的に分析する。ダルエスサラームの物乞い場で見られる、物乞い従事者と通行人との間で交わされる挨拶や世間話、無礼への対応等を事例とした分析を通して、常に相手を適切に尊重した所作を返すことで出会った相手との関係性をより友好的で継続可能なものへと維持または変化させる営みとしての「物乞い」の側面を明らかにする。ダルエスサラームで顕在的「欠損」保有者が継続的に行う「物乞い」とは、都市という場で出会う他者との匿名的関係性を個別的なものに変化させ、その個別性の獲得によって、贈与が含まれる物乞いという営みの継続可能性を高めていくような、具体的文脈に即した個別的な相互行為の集積であり、交渉であるということを指摘する。

終章では総論を行う。まず、アルビノと肢体障害者の生活のあり様の差異を確認し、第1章の知見との整合性を整理する。次に、顕在的「欠損」保有者にとって親族がセイフティ・ネットとして機能し得る効果を認めただけで、顕在的「欠損」保有者は必ずしもそのセイフ

ティ・ネット内に安住する者ではないことを確認する。物乞いは、セイフティ・ネットとしての親族からの支援を期待できない顕在的「欠損」保有者が都市の中で身内を増やし、経済的にも安定するための手段として機能している。物乞いに従事することは、規範的家族関係（特に男性にとって）や規範的労働イメージとの緊張や、公共空間での特殊な行為様式の内面化など、「常識」の壁を超えることを要請する。顕在的「欠損」保有者は、自らのもつ資源に鑑みて必要に応じてその壁を越えて生計を成り立たせている。

先行研究（特にアフリカの都市部を調査地とした障害者研究）が暗黙裡に設定していた生活者像に反して、本研究で示されたのは、ダルエスサラームに住む顕在的「欠損」保有者が、やはり「欠損」の有無にかかわらず、都市民的に広がった社会関係の中で、対面的関係においての交渉を日々行いながら、生活基盤を築いているという実態である。顕在的「欠損」保有者は、常に「欠損」によって把握される記号的な人々ではなく、その人柄、関係性、仕事ぶり、家族内での立場、所作等によって、周囲の人々から評価され、判断され、関係を取り結ばれている。制度が脆弱な社会においては人々が対面的になされる微細な振舞いによって、即時的社会関係、即時的に授受される物質、信頼、身内などを生み出すことが可能である。ダルエスサラームでは、顕在的「欠損」と「生活力の欠如」という認識は必ずしも癒着していない。調査地の「障害者」概念＝カテゴリーは、当該カテゴリーに含まれる人々を生活空間においても完全に分離されたものとして認識させる枠組としては機能していない。制度化された社会と比較したときのダルエスサラーム社会の不安定性を指摘しつつも、画一化とは対照的な形で、時空間に依拠して人々の生活上のシティズンシップを切り開く可能性を包含している点でダルエスサラーム空間を評価する。

以上により、本論文は「障害者」の制度的「分類・分離」が貫徹した社会に偏重して蓄積されてきた障害研究等への問いかけを行い、アフリカ地域研究（特に都市移住や都市生活に関わる研究）にはその対象の裾野を広げ、顕在的「欠損」保有者をみる重要性を主張する。